

論 文

# 廃用症候群が進み嚥下障害となった患者への 経口摂取についての一検討

洲崎 嘉子・宝住 由香・津田さき子

(社会保険鳴和総合病院)

## Successful Oral Intake of a Patient with Dysphagia Following Disuse Syndrome.

Yoshiko Susaki, Yuka Houzumi and Sakiko Tsuda  
Nruwa Social Insurance Hospital

### 要 旨

本研究は、長期間寝たきりの状態で廃用症候群となり、経口摂取も意思を伝えることも障害されていた患者を、より人間らしく生きられるようになることを目的に行なった。科学的看護論を用いて、対象特性を捉え、患者の反応からその主観を予測し、患者の生きてきた過程を重ね合わせてみていくことで、患者のニードを明らかにした。持てる力を引き出すためには経口摂取が可能になることが重要であると考えた。鎌倉の嚥下各期の訓練をもとにして、嚥下訓練を進めた。その結果、廃用症候群を持っているケースでも五感を通して快の刺激を与えることで機能回復になることがわかった。また、咬反射がなく舌の挺出も不可能な嚥下障害があっても、嚥下訓練開始と中止の基準を明確にし、消耗を少なくするよう整えれば経口摂取も可能になることがわかった。